

共同研究プロジェクト紹介 日本語レキシコンの 文法的・意味的・形態的特性 デキゴトの叙述とモノの叙述

著者	影山 太郎
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
号	6
ページ	17-25
発行年	2011-10
URL	http://doi.org/10.15084/00000682

〈共同研究プロジェクト紹介〉

日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性

デキゴトの叙述とモノの叙述

Event Predications and Property Predications

影山 太郎 (KAGEYAMA Taro)

国立国語研究所長 (Director-General, NINJAL)

《要旨》 基幹型共同研究「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」における研究テーマの中から「事象叙述」と「属性叙述」の言語学的な区別に関する成果の一部を略述する。事象叙述とは、「いつどこで誰が何をした」のように時間の流れに沿って展開するデキゴト（動作、変化、状態など）を述べることで、属性叙述とは「地球は丸い」のように主語あるいは主題となるモノの恒常的な特性を述べることである。従来は、両者の違いは単に意味解釈あるいは語用論の問題と見なされてきたのに対して、本稿では、属性叙述という意味の現象が実は、統語論・形態論という形の問題と深く関わる文法現象であることを様々な事例で実証的に示す。

Abstract: This paper provides an interim report on the investigation into the linguistic significance of the distinction between event and property predications that is being carried out as part of Kageyama's collaborative research project "Syntactic, Semantic, and Morphological Characteristics of the Japanese Lexicon." A variety of empirical data is provided to show that the function of property predication, which has been regarded merely as a matter of semantic or pragmatic interpretation, has direct repercussions on the syntactic and morphological structures of language.

1. 本共同研究プロジェクトの目標

言語学の基本的な課題の1つは、言語における意味と形の対応関係を明らかにすることである。1つの単語は1つの意味しか持たないというのが、ある意味では理想的かも知れないが、現実には、同じ1つの単語が、用いられる構文や文脈によって様々な意味に解釈されるし、また、1つの単語であっても複数の統語的用法を持つことがしばしば観察される。それは、「1つの単語 = 1つの意味」とすると脳の記憶に相当な負担がかかるという物理的な制約だけでなく、人間の言語そのものが多彩な表現を無限に展開できるという生産性と創造性を固有に備えているからである。

意味と形の対応関係に関する問題は、単語のレベルだけでなく、句のレベルや文のレベルにも共通して指摘できる。現代の言語学では、この形と意味の対応関係を包括的に説明しようとする理論（生成文法、認知文法など）が様々な提案されているが、それは主として、文すなわち統語構造に依拠するものである。これに対して、影山班の基幹型共同研究「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」では、語彙意味論（語の構文的な用法はその語の語彙の意味から概ね予測することができるという考え方）の観点から個々の語彙の意味に基づいて形態構造および統語構造における意味と形の対応関係を明らかにしようとしている。

言語において形と意味が一對一に対応するのがノーマルな姿であるとする、言語理論の観点から興味深いのは、形と意味の対応にミスマッチ（ずれ）が生じる場合である。語のレベルでは、たとえば「空きっ腹」と「太っ腹」を比べると、前者は文字通り「空いている腹（胃袋）」を意味するのに対して、後者は「太い腹」という意味ではなく、むしろ語順を逆にして「腹が太い」と言い換えるとぴったりくる意味を表している。「日本文化」というと「日本の文化」という意味であって、「文化の日本」ではないということから分かるように、一般的に、複合語は前の要素が後の要素を修飾するという右側主要部の関係にある。したがって、上例の「空きっ腹」はこの一般的規則に即している。他方、語順を入れ替えなければ適切な解釈ができない「太っ腹」は複合語の一般規則に違反していることになる。なぜこのような例外が生じるのかを明らかにすることによって、言語の創造性 (creativity) が見えてくる (Kageyama 2010)。

句のレベルでは、たとえば「先祖の墓参り」という名詞句は、形の上では「先祖の」という所有格が「墓参り」全体を修飾して [先祖の [墓参り]] という構造を作っているが、意味的には [[先祖の墓] 参り] すなわち「[先祖の墓] に参る」と解釈される。ここでも、形と意味にズレが見られる。しかしこのような例外は無制限に起こるのではない。「Xの墓参り」という表現で「X」の部分に適合する表現と、適合しない表現を見てみると、「昨年亡くなった友人の墓参り」はよいが、「*御影石の墓参り」や「*多摩霊園にある墓参り」とは言えない。「X」の部分に対する制限を究明することによって、語彙の意味と統語構造の関係が分かってくる (影山 2002)。

文のレベルでは、「先生は眠そうな目をしている」と「先生は青い目をしている」を比べてみよう。この2文は見かけは同じ構造を取っているようであるが、意味的には大きな相違がある。通常、「～をする」に「ている」が付くと、「いま宿題をしている」のように現在進行中の動作や状態を表すか、あるいは「もう宿題をしている」のように動作・変化の着手や完了を表すかのいずれかである。この原則に反して、「青い目をしている」が表す意味は現在進行中の動作や状態でもなく、また変化の開始や完了でもない。「先生は青い目をしている」というのは「先生は目が青い」という主題（先生）の恒常的な属性を表す特殊な構文である。次節で述べるように、この構文は意味的に特殊であるだけでなく、たとえば「*私は、先生に青い目をされた」と言えないことから分かるように間接受身文に書き換えられないという統語的な特殊性も持っている (影山 2004)。

こういった問題の多くは、用いられている語彙（単語）の意味的な性質に深く根ざしている。本研究プロジェクトは、語や形態素（接頭辞、接尾辞など）が組み合わされて複雑な語や文を作るダイナミックな仕組みとその意味解釈の関係を探求することによって、膠着型とされる日本語がヨーロッパ型の言語とどのように異なるのかを明らかにすることを目指している。日本語の特徴となる現象は多岐にわたるため、世界の言語学理論に貢献し得るテーマとして次の4つのテーマを選び、それぞれのチームが連携しながら研究を推進している。

- I. 「事象と属性」チーム
- II. 「動詞の自他と項交替」チーム—Max Planck 研究所と部分的に連携
- III. 「複合動詞・複雑述語」チーム—言語対照研究系の Pardeshi 班と部分的に連携
- IV. 「語形成の統語と意味」チーム

このうち、「事象と属性」チームは、2011年6月19日に日本言語学会第142回大会(日本大学)において公開シンポジウム「言語におけるデキゴトの世界とモノの世界」を開催したので、本稿ではこのシンポジウムの概要を紹介する。

2. 事象(デキゴト)と属性(モノ)

本稿で「事象」と呼ぶのは、(1a, b)に例示するような出来事や動作の発生、および(1c)のような一時的状態の継続を指す。事象を表す文を事象叙述文と呼んでおく(益岡編2008)。

- (1) 事象を表す文(事象叙述文)
 - a. 出来事：昨日、友人に双子が産まれた。
 - b. 動作：私は、毎日5時から6時までジョギングをする。
 - c. 一時的状態：この契約書は、まだ白紙です。
- (2) 主語ないし主題の属性を表す文(属性叙述文)
 - a. ネコ(というの)は、ネズミを追いかける(ものだ)。[*毎日5時から6時まで]
 - b. 私の父は背が高い。[*今だけ]
 - c. この文書は和紙です。[*まだ]

事象叙述文は、特定の時間を表す副詞や、「まだ/もう」のような事態発生を含意する副詞と共起できることが特徴となる。これに対して、(2)の例は、主語ないし主題となる名詞(句)の属性を表す文で、属性叙述文と呼んでおく。属性叙述文は、事象叙述文と異なり、時間を特定するような副詞と共起しないという特徴を持つ。属性叙述の対象となる名詞句は、(2a)のように総称名詞句のこともあるが、それだけでなく、(2b, c)のように特定の指示対象を指す指示名詞句のこともある。

事象叙述と属性叙述の対比は、英語等の形式意味論研究において場面レベル述語(stage-level predicates)と個体レベル述語(individual-level predicates)と呼ばれるものと各々対応するようである(Carlson 1980, Carlson and Pelletier (eds.) 1995)。

- (3) a. 場面レベル述語：一時的な状態を表す述語
The doctor is {available/sick/drunk/naked} at this moment.
- b. 個体レベル述語：恒常的な性質を表す述語
The doctor is {tall/intelligent/knowledgeable} (*at this moment).

(3a)では at this moment (今)という特定の時間を指すことができるが、(3b)ではそれができない。ただ、英語の研究では場面レベル/個体レベルの「述語」という表現が用いられ

ることが多く、available や intelligent といった形容詞の意味的性質の違いと捉えられがちである。しかし (1) や (2) の日本語例から窺えるように、形容詞だけでなく、名詞や動詞を述語とする文においても同じ違いが観察されるから、「述語」だけでなく文全体の問題として捉えなければならない。

ここまでの説明では、事象叙述と属性叙述の区別は意味解釈の違いであり、文法とは関係ないと思われるかも知れない。しかしながら最近の筆者の研究 (Kageyama 2006, 影山 2009) では、両者の意味的な違いは、統語的 (文法的) な性質の違いと相関していることが明らかになってきた。とりわけ重要なのは、属性叙述文がそれに対応する事象叙述文と比べて他動性 (Transitivity) が低いということである。たとえば、(4a) と (4b) は見かけは似ているものの、前者は間接受身文にできるが、後者はそれができない。

- (4) a. 学生達は眠そうな目をしていた。【事象】
私は、学生達に眠そうな目をされた。
- b. 英語の先生は青い目をしている。【属性】
*私は、英語の先生に青い目をされた／していられた。

このように、事象叙述と属性叙述は統語論と深く関係する文法現象なのである。

さて、事象叙述文 (いわばデキゴトの世界) と属性叙述文 (モノの世界) が意味的にも文法的にも別々のものであるとすると、次には、これら2つの世界は明確に分断されているのか、それとも両者は相互に行き来が可能なのかという疑問が生じる。上述のシンポジウムでは、この点を中心に議論を深めた。

3. 属性から事象への変換

まず、元は属性叙述である表現が事象叙述に変わる場合であるが、これについては、特に英語に関してよく研究されている (Carlson and Pelletier (eds.) 1995, Fernald 2000)。

- (5) a. The salesman is (being) polite. (being = 一時的, 意図的)
b. I saw Robin being polite. (being が無ければ非文法的)
- (6) a. その子は |おとなしい／おとなしくしている|。
b. その子は (先生の前では) 無口だ。

英語では (5a) のように進行形にすると「意図的にそのような態度を取っている」という一時的状態を表す。(5b) の知覚動詞 see は補文に事象しか取らないので、being を省くと非文法的になる (Fernald 2000)。日本語 (6a) も同様に「している」が付くことで一時的な状態になる。同じ効果は、(6b) の「先生の前では」のような場所副詞によっても得られる。言い換えると、本来なら属性を表す表現が一時的状態という事象を表すためには、進行形や場所副詞といった事態発生を含意する文法要素が必要である。これらの文法要素が元々「事象性」を有しており、その事象性が文全体の事象解釈を強制 (coercion) していると考えられる。

シンポジウムにおける八亀裕美の発表「日本語諸方言の形容詞述語文」では、(7)のような青森県五所川原方言の例が紹介された。

- (7) a. 太郎, 元気だ。 田中さん, 駅長だ。(恒常的特性)
 b. 太郎, 元気であら。 田中さん, 駅長であら。(一時的状態)

普通なら恒常的特性を表す表現(「元気, 駅長」)に存在動詞が接合して, 一時的状態を表している。言い換えると, 「であら」が事象性を元々備えていると考えられる。

4. 事象から属性への変換

上とは逆に, 普通なら事象を表すはずの構文が, 主語ないし主題の属性を表すようになるという現象は, いろいろな言語で散発的に記述が見られる程度で, まとまった詳細な研究はない。諸言語の様々な属性叙述現象を通観した影山(2009)では, (8)に挙げるような構文を論じている(Kageyama(2006)も参照)。

- (8) ・英語・ハンガリー語で動作主を描写する形容詞的過去分詞
 ・英語・日本語等の異常受身文
 ・スペイン語等の非人称再帰構文
 ・ロシア語等で動作主の属性を表す非人称再帰接辞
 ・英語の付加詞主語構文
 ・日本語の「青い目をしている」構文
 ・マニプル語における特殊な能格標示
 ・日本語の動作主複合語など

これらの現象に共通して観察されるのは, 次のような特異性である。

- (9) A. これらの構文が通常の事象叙述文で使われたときには, ある一般的な原則に従い, その一般原則に違反すると, 普通なら当然, 非文法的な文になる。
 B. ところが, (8)に掲げた現象は, その一般原則から逸脱しているにもかかわらず, 非文法的にならず, 当該言語において適格文として受け入れられる。
 C. 原則違反であるのに許容される逸脱文は, 見かけの構文形式は多岐にわたるものの, 意味的にはすべて事象叙述ではなく属性叙述になっている。

簡単な例として, 名詞と他動詞が組み合わされた複合語を考えてみよう。たとえば, 「読む」という他動詞を複合語にすると, (10a)のように目的語と複合し, (10b)のように主語とは接合しない。この制約は, 英語その他の言語でも共通して観察される(「神隠し」のような例外はあるが, 生産的に作られるものではない)。

- (10) 一般原則: 複合語形成において他動詞は目的語と結びつき, 主語とは複合しない。

- a. 子供の [本読み] book-reading (by children)
- b. *本の [子供読み] *child-reading (of books)

ところが、日本語や韓国語では他動詞が主語と結びついて、次のような複合語が生産的に作られる（影山 2009, Kageyama (in press)）。

- (11) a. プロカメラマンが（主語）ポートレートを（目的語）撮影する。
- b. [プロカメラマン撮影] のポートレート
 このポートレートは [プロカメラマン撮影] です。

(11b) の [プロカメラマン撮影] は (10) の制約に違反しているが、日本語として適格である。その理由は、「プロカメラマン撮影」全体が主題名詞「ポートレート」の特性を描写しているからである。先ほどの「本読み」の場合は、「本読みは良いことだ」のようにそれだけで名詞として使用できるが、「プロカメラマン撮影」の場合は、「*プロカメラマン撮影は良いことだ」のように単独の名詞としては使えず、必ず、(11b) の構文のように主題となる名詞「ポートレート」を叙述ないし修飾する用法でなければならない。

このように元来は事象を表すはずの構文が一般的な制約を破って、属性叙述という特殊な意味で用いられるという例は上掲 (8) に示した現象のほかにも発見できるはずである。上述のシンポジウムでは、このような例を各講師に掘り起こしてもらった。

Stephen Wright Horn 「日本語のいわゆる主語から目的語への繰り上げ構文」では、「私はこのネコをかわいいと思う」のように、本来なら「が」で標示されるべき名詞句が「を」（対格）で標示される特殊構文を取り上げ、この構文が許されるのは埋め込み文の述部が対格主語（ネコを）の属性を表す場合に限られることを論じた。

- (12) a. *花子は、猫を足拭きマットの上にいると思っている。
- b. アケミは、ヒロシを妻子がいると思っている。（=ヒロシを妻子持ちだと）

(12b) では、「ヒロシを」が「妻子がいる」の主題になっているが、角田太作「ワロゴ語（豪州）における属性の表現」は、同じように対格で標示された名詞句が属性の主題として解釈される例をオーストラリア先住民のワロゴ語から提示した。

- (13) yamba-Ø yarro-Ø jarribara-Ø nyina-ri-lgo.
 camp-ACC this-ACC good-ACC sit-APPL-PURP
 ‘This camp is good/nice to stay in.’

(13) は適用構文 (applicative) を用いた文で、通常、適用構文は事象叙述を表し、動作主も明示される。ところが、(13) では動作主が削除され、対格で標示された名詞句が文頭に来て、文全体としては「このキャンプは休むのによい」という属性叙述の意味を伝えている。

沈力「中国語の付加詞主語構文について」は、中国語で道具や場所を表す名詞句が主語になるという特殊な構文を調査し、通常は許されないはずの道具および場所主語が、その道具・

場所の用途（属性）を表す場合には例外的に許されることを指摘している。道具主語に関するこの議論は日本語にも当てはまる（影山・沈，印刷中）。

- (14) a. 这把 菜刀 切 牛肉， 那把 菜刀 切 猪肉。
 「この包丁は牛肉を切り，あの包丁は豚肉を切る（ものだ）。」
 b. 这个 房间 画 画儿， 那个 房间 锻炼 身体。
 「この部屋は絵を描き，あの部屋は体を鍛える（ところだ）。」

呉人恵「コリヤーク語の属性叙述専用形式と異常な統語操作」では、チュクチ・カムチャツカ語族のコリヤーク語において従来適切に分析されなかったある派生接尾辞が動詞，形容詞，名詞，副詞に付いて主題の属性を表す形容詞を形成することを論じている。この接尾辞も，一般的な構造制約に違反して属性形容詞を派生する役割を持つ。

益岡隆志「日本語の属性叙述と主題標識」は「X トイウ N ハ」という形で表出される主題を取り上げ，これが，対象 X がどのようなカテゴリーに属するかを述べる構文であることを指摘した。

- (15) a. 幸子という女は，いい加減で，めちゃくちゃな女だ。【属性】
 b. *幸子という女は，階段で転んで泣いた。【事象】

主題卓越型言語とされる日本語では，主題は典型的に「ハ」で表されるが，「ハ」を用いた主題文は事象叙述の場合も属性叙述の場合もあるから，「ハ」を属性マーカーと同一視することはできないが，「X トイウ N ハ」は属性だけに限られるというのが益岡の主張である。

最後に，筆者の「属性と事象の区別とその言語学的意義」では新しい事例を幾つか指摘した。

●非対格動詞に付く「～づらい」

「～づらい」は典型的に「動作主」を主語に取る他動詞または非能格動詞に接合し，「私はあなたの言うことを理解しづらい」のようにその主語が動作の遂行に困難を感じることを述べる。ところが，この一般的制約に反して，非対格動詞に「づらい」を付けた例（16）が最近，観察される。重要なことは，典型的な「動詞+づらい」が事象叙述文であるのに対して，これらの変則的な「づらい」は属性叙述（17）であるという点である。

- (16) a. 歩きやすく脱げづらい靴
 b. ほどけづらい靴紐
 c. PP 製で割れづらい CD ケース
 d. 酸素は水に溶けづらい。
 (17) a. 私は，今日だけは，あなたの言うことに賛成しづらいです。【事象】
 b. これは（*今日だけは）脱げづらい靴です。【属性】

●方言における属性可能

標準語や多くの方言では，1つの可能形式が状況可能，能力可能，属性可能の3タイプの

可能を表すという一般性が見られる。ところが、この一般ルールから逸脱して、属性可能だけを別の形式で表す方言がある。静岡県大井川流域の井川方言（中田 1981）では、状況可能と能力可能は標準語の「(ら)れる」にあたる「エル／エール」で表されるが、属性可能には「エル／エール」ではなく「サル」（本来は自発態）が使われる。すなわち、属性叙述は特殊な機能であり、それを表現するために変則的な形態が用いられる。

- (18) a. 指示的な主語名詞句の一般的特性
コノカーワ ミズガ キタネエーデ オヨガーサラノーゾイ。
(この川、水が汚いので、泳げないぞ)
- b. 総称的主語の一般的能力
ニンゲンワ コトバー シャベラーサル。(人間はことばをしゃべれる)

●第四種の動詞「そびえる」

「そびえる」は金田一分類では第四種の動詞で、終止形に「～している」が必要とされるが、この一般原則に反して、「そびえる」が単純現在形で使われる例が観察される。

- (19) a. イタリア北部にはアルプスの山々がそびえる。
b. 上海には数々の超高層ビルがそびえる。(インターネットからの例)
- (20) a. イタリア北部には何千年ものあいだアルプスの山々がそびえている。【事象】
b. イタリア北部には(*何千年ものあいだ)アルプスの山々がそびえる。【属性】

この用法の「そびえる」は文法的に誤りというわけではなく、(20)に示すように「そびえている」は事象叙述、「そびえる」は属性叙述であるという機能的な相違がある。これも、一般原則から外れているのに許容される表現が属性叙述として機能する例である。

5. まとめと展望

本稿では、影山班の共同研究プロジェクトの中で、「事象と属性」チームの研究成果のごく一部分を説明した。詳細は『属性叙述の世界』と題する論文集としてくろしお出版から出版予定である。

第4節で略述した様々な現象は、一見、相互に無関係で統一性のない現象のように見える。しかしながら、それらはすべて、一般的に観察される規則・制約に違反しているのに日本語として文法的に受け入れられる文を形成しているという点で共通し、しかも、いずれもが属性叙述を表している。これらは、これまでのほとんどの統語論研究が対象としてきた事象叙述文の観点からすると、説明のつかない例外的で有標の現象である。しかしいったん、分析の視点を事象叙述文から属性叙述文に切り替えるなら、もはや例外ではなくなり、属性叙述という1本の糸できれいに結ばれることになる。属性叙述の世界を集中的に調査・分析することで、従来の言語学研究でほとんど見過ごされてきた現象を生き返らせ、新しい言語学の視界を拓くことができると期待される。

参考文献

- Carlson, Gregory (1980) *Reference to kinds in English*. New York: Garland.
- Carlson, Gregory and Francis Pelletier (eds.) (1995) *The generic book*. Chicago: University of Chicago Press.
- Fernald, Theodore (2000) *Predicates and temporal arguments*. Oxford: Oxford University Press.
- 影山太郎 (2002) 「語彙と文法」 斎藤倫明 (編) 『朝倉日本語講座 4 語彙・意味』 170-190. 東京: 朝倉書店.
- 影山太郎 (2004) 「軽動詞構文としての「青い目をしている」構文」 『日本語文法』 4(1): 22-37.
- Kageyama, Taro (2006) Property description as a voice phenomenon. In: Tasaku Tsunoda and Taro Kageyama (eds.) *Voice and grammatical relations*, 85-114. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 影山太郎 (2009) 「言語の構造制約と叙述機能」 『言語研究』 136: 1-34.
- Kageyama, Taro (2010) Variation between endocentric and exocentric word structures. *Lingua* 120: 2405-2423.
- Kageyama, Taro (in press) Postsyntactic compounds and semantic head-marking in Japanese. Bjarke Frellesvig and Peter Sells (eds.) *Japanese/Korean Linguistics 20*. Stanford: CSLI.
- 影山太郎・沈力 (印刷中) 「付加詞主語構文の属性叙述機能」 影山太郎・沈力 (編) 『日中理論言語学の新展望 2 意味篇』 東京: くろしお出版.
- 益岡隆志 (編) (2008) 『叙述類型論』 東京: くろしお出版.
- 中田敏夫 (1981) 「静岡県大井川流域方言におけるサル形動詞」 『都大論究』 18: 1-13.

影山 太郎 (かげやま・たろう)

国立国語研究所長。Ph.D. (言語学) (南カリフォルニア大学)。関西学院大学名誉教授。2009年10月より現職。

主な著書・論文: 『文法と語形成』 (ひつじ書房, 1993), 『動詞意味論』 (くろしお出版, 1996), 『ケジメのない日本語』 (岩波書店, 2002), 『名詞の意味と構文』 (編著, 大修館書店, 2011), *Voice and grammatical relations* (共編, John Benjamins, 2006)。

受賞: 市河賞 (財団法人語学教育研究所, 1980), 第22回金田一京助博士記念賞 (金田一京助博士記念会, 1994)。

社会活動: 日本言語学会会長, 日本語学会評議員, 日本英語学会評議員, 言語系学会連合運営委員長, 財団法人日本国際教育支援協会理事, 特定非営利活動法人言語資源協会理事。

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」

プロジェクトリーダー 影山太郎 (国立国語研究所長)

プロジェクトの概要

和語・漢語・洋語・擬態語を含み複雑な語彙の構成を持つ日本語のレキシコン (語彙体系と語形成過程) は, 世界的に見て特徴的な性質を豊富に備えている。本プロジェクトは, ヨーロッパ言語と比して日本語の特徴が顕著に現れる現象として, (1) 動詞の自他と項交替, (2) 複合動詞, (3) 属性叙述における語彙と文法の係わり, (4) 語形成における形態論と意味論・統語論の相互関係という4つのテーマに着目し, 日本語レキシコンの特質を形態論・意味論・統語論の観点から総合的に解明することを目指す。